

徒然草の思想

——特に仏教文学作品としての一試論——

鷺山樹心

一	「無常」ということ……………	二七一
二	人のいとなみ……………	二七四
三	「諸縁放下」のすすめ……………	二七八
四	「遁世」ということ……………	二八二
五	存命のよろこび……………	二八五

徒然草を読み進めて、時に深い感銘をおぼえることがある。それは、時代を超えて、昔も今も変わらない人生の真相、人間の本质、さらには、人のあるべきようを、兼好のことばで、じかにぶっつけられた時である。

小論は、文学作品としての徒然草を、仏教と文学の一つの接点として把らえようと試みるものであり、中世期を生きた著者兼好は、彼の仏教思想をとおして、世の中をどのようにに把らえ、人のあるべきようを、どのようにに説いているか、また、それは現代にどのようにかかわり、どのような意義を持つか、これらの点について述べようと考えられるものである。

## 一 「無常」ということ

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り、事さり、樂しび、悲しびゆきかひて、花やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり、変らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん。まして、見ぬいにしへのやん事なかりけん跡のみぞ、いとはかなき。

(第二五段)

右は兼好が、京極殿・法成寺の廃虚のあとにたたずんで、道長一代の栄花の昔を偲びながら、「万物流転」の真相を詠嘆したことばである。道長は、藤原一門のゆくすえまでの繁栄を夢み、粹をあつめ、贅をつくして、法成寺を造営した。その寺領には多くの莊園を寄進し、皇室の後見役として、一国の重鎮として、彼は、永遠のいやさか

を祈念したのである。栄花物語には、この法成寺造営の絢爛たるありさまを、「かの須達長者の祇園精舎造りけむもかくやありけむと見ゆる」とさえ述べている。その法成寺が、よもや、今日のこの荒廢をみようとは。「栄枯盛衰」人の世のいとなみのはかなさを思い、兼好は、「されば、万に見ざらん世までを思ひ掟てんこそ、はかなかるべけれ」と述懐して、一段を結んでいる。

「無常」の相は、目に写る形の世界だけではない。人の心の世界にも、影の形にそうように密着する。

風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、なれにし年月を思へば、あはれと聞きしことの葉ごとに忘れぬものから我が世の外になりゆくならひこそ、亡き人のわかれよりもまさりてかなしきものなれ。

(第一六段)

人は、つかの間の心の触れあい感傷し、歎喜し、永遠を誓いあうが、その恋もちぎりも、いつかは霧散することのなんと多いことであろう。そのすがたは「亡き人のわかれ」にも増して痛ましい。兼好は、常住を願ってやまない人の心に反して、いずこからともなくしのびよる「無常」の聲音を鋭敏に予知している。

人間の営み合へるわざを見るに、春の日に雪仏を作りて、そのために金銀珠玉のかざりを営み、堂をたてんとするに似たり。その構へをまちて、よく安置してんや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること、雪のごとくなるうちに、営み待つ事甚だ多し。

(第一六六段)

まことに、人のいとなみというものは、春の日の雪仏を莊嚴するようなものに相違ない。人は、そのような、むなししいとなみのくりかえしのなかで、やがていのちを終わる。しかも、命終の後の推移変化ほど、さらにむなししいものはない。それを追求する兼好の目には、いたって敵しいものがある。

人の亡きあとばかり悲しきはなし——思ひ出でてしのぶ人あらんほどこそあらめ、そもまたほどなくうせて、聞きつたふるばかりの末々は、哀とやは思ふ。さるは、跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては、嵐にむせびし松も千年をまたで薪にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ悲しき。

(第三〇段)

人の在生を、このようにながめるとき、なに一つとして常住不変のものはない。そのすがたを凝視するとき、ただ寂寥感・落莫感ばかりが、心の空洞を吹きぬける。「無常変易の境、ありと見るもの存せず。始ある事も終なし。志は遂げず。望は絶えず。人の心不定なり。物皆幻化なり。何事か暫くも住する。」(第九一段)「愚かなる人は、またこれを悲しぶ。常住ならんことを思ひて、変化の理を知らねばなり。」(第七四段)

一体「人世無常」の理を深く認識するならば、万事は「空」の一字にこめつくされよう。も早「無常」に感傷し詠嘆するいとまさえない。

「無常」の基盤の上に建てられた人間のいとなみなど、いわば砂上樓閣のたとえそのものである。物みなは変化

する。昨今しきりに人生七十余年が宣伝されるが、しかし、そのことをもって、各個人に七十余年のいのちを保障することは、絶対に不可能である。「諸行無常・万物流転」それは万代不易の鉄則である。「刹那覚えずといへども、これを運びて止まざれば、命を終ふる期、忽ちに至る。」(第一〇八段)「死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり。」(第一五五段)「人はただ、無常の身に迫りぬる事を心にひしとかけて、束の間も忘るまじきなり。」(第四九段)右のように、兼好は、徒然草の随所に「無常」認識の要を説いている。徒然草に現われた兼好の思想の基調をなすものは、実に、この自覚的無常観にほかならない。<sup>(1)</sup>

## 二 人のいとなみ

蟻のごとくに集まりて、東西に急ぎ、南北に走る。高きあり、賤きあり。老いたるあり、若きあり。行く所あり。帰る家あり。夕に寝ねて、朝に起く。いとなむ所何事ぞや。生をむさぼり、利を求めて止む時なし。

(第七四段)

朝夕、巷の雑踏にもまれながら、ふと、右のことばが口ずさまれる折がある。

人は、それぞれ、今日よりは明日に、なにかを求め、あるいは、今の刹那に生きようとして、東奔西走する。ひそかに、人の暮らしの本質はと自問してみると、つまりは「生をむさぼり、利を求め」るほかの、なにものでも

ないように思われる。「無常変易」の現実相に目をそらし、目前の「名利」につまづきたおれ、なお、明日に望みをつないで生きるのが人であり、刹那の享樂に、明日を忘れて生きるのも人なのである。

しかし「無常」の前には、人の欲望はむなし。「身を養ひて何事をか待つ。期する処、ただ老と死とにあり。その来る事速かにして、念々の間に止まらず、これを待つ間、何のたのしびかあらん。」(同段)そのむなしさを、理論の上では知りながら、なお人は、実際の生活面では「名利」を追求してあくことを知らない。これは、世のありさまと、人のありかたとの、大きな矛盾であり、逆流でもある。

兼好は、なべて、この矛盾にみちた人のくらしのありかた、特に「名利」のむなしさ、おろかさを、厳しく批判する。「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむこそ、愚かなれ」(第三八段)と、指摘する。

ところで、兼好の、「名利」についての分析には興味深いものがある。兼好は、先ず「名利」の内容を、利欲・地位欲・知識欲の三類にわけ、「利にまどふは、すぐれて、愚かなる人なり」「偏に高き官・位を望むも、次に愚かなり」(「知恵と心」これを願ふも、次に愚かなり)と、そのいずれをも段階的に否定している。(第三八段)

なるほど、露骨な利欲や地位欲というものが、それぞれに、決して好ましいものではないことは誰もがよく口にする。だが、現実の人の暮らしというものは、その好ましくはないはずの利欲・地位欲に、多少ともわずらわされずにはすまない仕組みになっている。ことに知識欲についていうならば、われわれは、むしろ肯定的ですらある。知識は広く深くありたいと思う。しかし、兼好によれば、その知識欲も、帰するところ自己の知恵・才覚のほまれを愛することにほかならず、その「誉を愛する」ことは、とりもなおさず、常に「人の聞き」に満悦し、それに執

着することにほかならない。兼好は、この意味からみた知識欲について、「誉むる人、そしる人、共に世に止まらず、伝へ聞かん人、またまたすみやかに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。誉はまた毀の本なり。身の後の名、残りてさらに益なし。」(第三八段)とみて、これを利欲・地位欲に準じて否定する。ここに兼好のパラドックスがある。けだし兼好は、自己に満足し名利に連なる種類の知恵・才覚の追求を、空虚なものとして許容しなかつたことが知られる。

一体、相対の基盤の上に、絶対的なものがあるはずはない。「迷ひの心をもちて名利の要を求むるに、かくの如し。万事は皆非なり。言ふにたらず願ふにたらず。」(同段)このように兼好は、「迷ひの心」に立脚したもろもろの欲望の本質的なむなしさを、口をきわめて批判しているのである。さらに立場をかえて兼好は、人の「楽欲」がたうよくについて次のように論を展開する。

楽欲する所、一つには名なり。名に二種あり。行跡と才芸との誉なり。二つには色欲、三つには味なり。万のねがひ、この三つにはしかず。これ、顛倒の相よりおこりて、若干のわずらひあり。もとめざらんにはしかじ。

(第二四二段)

右によると、「楽欲」の本質は、深く人間の本能に根ざしたものと考えているようである。一般に、名誉欲・色欲・食欲の三つは、人間の本能と考えられるが、兼好は、これらの欲求は、元来「違順」に拘束された結果の「顛

倒の相」に誘発されたものであり、したがって「もとめざらんにかじ」というのである。

なるほど、無常變易の実相に照らすとき、理論的には、まさしくその通りであろう。だが、実際には、その三つの「楽欲」は、よほどの覚悟をもって臨んだとしても、たやすくは制御しがたく、かえって煩惱の熾烈さを、まさざとみせつけられたりもする。ここにたとえば、兼好は、特に「色欲」をとりだし、次のように述べている。「世の人の心まどはず事、色欲にはしかず。人の心は愚かなるものかな。匂ひなどは仮のものなるに、しばらく衣裳に薰物すと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心どきめきするものなり。久米の仙人の、物あらふ女の脛の白きを見て、通を失ひけんは、誠に、手足・はだへなどのきよらに肥えあぶらづきたらんは、外の色ならねば、さもあらんかし」（第八段）「すべての女の、うちとけたる寝も寝ず、身を惜しとも思ひたらず、堪ふべくもあらぬわざによく堪へしのぶは、たゞ色を思ふがゆえなり」（第九段）女人の白脛に魅入られて通力を失った久米仙人の故事に「さもあらんかし」と、理解を示し、寸筆に託して、女人の官能を活写し得たところに、楽欲の強さを、みずから体験した人の深さを感じるのは、わたくしだけであろうか。思うに、兼好は「楽欲」の対象を、仮想し、それをおそれ、さげよとさとするのではない。すべては、現実凝視の言説である。「まことに、愛著の道、その根ふかく、源とほし。六塵の楽欲おほしといへども、皆厭離しつべし。その中に、ただ、かの惑のひとつ止めがたきのみぞ、老いたるも若きも智あるも愚かなるも、かはる所なしとみゆる。」（第九段）愛欲の旧里の、いかにのがれがたいかを知りつきた者の言説であり、それだけに、「みづからいまして、恐るべく慎むべきは、この惑ひなり」（同段）というこ

まことに、人のいとなみは、わずらわしく、はかない。人は、「一日のうちに、飲食・便利・睡眠・言語・行歩、止む事を得ずして、多くの時を失ふ。そのあまりの暇幾ばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事を言ひ、無益の事を思惟して時を移すのみならず、日を消し、月を亘りて、一生を送る、尤も愚かなり」(第一〇八段)

兼好は、かく、無常の基盤上に起居しながら、それを深くは知ろうとせず、ただ目前の「名利」「楽欲」に翻弄される人間の赤裸々な姿を摘出して、その一つ一つを、切実な自己体験をとおして、批判するのである。

### 三 「諸縁放下」のすすめ

もし人來りて、我が命、明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るゝ間、何事をか頼み、何事をか營まん。我等が生ける今日の日、何ぞその時節に異ならん。

(第一〇八段)

近き火などに逃ぐる人は、「しほし」とやいふ。身を助けんとすれば、恥をもちへり見ず、財をも捨てて逃去るぞかし。命は人を待つものかは。無常の来る事は、水火の攻むるよりも速に、のがれがたきものを。その時、老いたる親、いとけなき子、君の恩、人の情、捨てがたしとて捨てざらんや。

(第五九段)

無常の到来は予測しがたい。しかし、そのあゆみは確實でしかも早い。今、もし、目前に死の到来を宣告された

と仮定してみよう。その時、人は、無常変易の理の突然の具体化に驚き恐れ、今しがたまで、あかず追い求めた「名利」も「楽欲」も「恩愛」の情も、すべては一睡の夢でしかなかったことを思い、存命の間に、なにをなすべきであったかを、痛切に反省するであろう。「死におもむかざる程は、常住平生の念に習ひて、生の中におほくの事を成じて後、閑に道を修せんとおもふほどに、病をうけて死門にのぞむ時、所願一事も成ぜず。いふかひなくて、年月の懈怠を悔いて、この度若たちなほりて命をまたくせば、夜を日につぎて、この事かの事おこたらず成じてんと、願ひをおこすらめど、やがておもりぬれば、我にもあらず、取りみだしてはてぬ」(第二四一段)まさに、そのとおりであろう。死は対岸の火ではない。火宅無常の世間に棲息しながら、人はどうして、これを実感として受けとめようとはしないのであろう。「世を長閑に思ひて打ち怠りつゝ、先ずさしあたりたる目の前の事にのみまぎれて月日を送れば、ことごとくなす事なくして、身は老いぬ。——悔ゆれども取り返さるゝ齡ならねば、走りて坂を下る輪のごとくして衰へゆく」(第一八八段)これは、日常の雑事に身を勞して、無自覚の中に、衰亡の急斜面を奈落に向つて驀進する者への、きわめて適切な警告である。

世にしたがへば、心、外の塵に奪はれて惑ひやすく、人に交れば、言葉よその聞きに随ひて、さながら心にあらず。人に戯れ、物に争ひ、一度は恨み、一度は喜ぶ。その事定まれる事なし。分別みだりに起りて、得失止む時なし。惑ひの上に酔へり。酔の中に夢をなす。走りて急がはしく、ほれて忘れたる事、人皆かくのごとし。

(第七五段)

世俗の「名利」「榮欲」は、追求すれば際限がない。兼好は、これらの一切は、妄想であり、顛倒であることを諦観し、先ず、いさぎよくこれらを放下して、すみやかに無碍の一道に向うべきことを説く。

所願を成じて後、暇ありて道にむかはんとせば、所願尽くべからず。如幻の生の中に何事をかなざん。すべては所願皆妄想なり。所願心にきたらば、妄心迷乱すと知りて、一事をもなすべからず。直ちに万事を放下して、道にむかふ時、さはりなく、所作なくて、心身ながくしづかなり。

(第二四一段)

万事を放下して、求道するとき、その生活態度の中に、おのずから身・口・意の業縛を解脱して、身も心も、ながく寂靜の境に住し得るといふ。

兼好は、この諸縁放下を、随所に提唱している。たとえば、人間生涯の中で、「むねとあらましからん事」の中から、更に「第一の事を案じ定めて、その外は思ひすてて、一事を上げむべし」といい、「一時の懈怠、即ち一生の懈怠となる。これを恐るべし」(第一八八段)と、さとす。あるいはまた、「道を学する人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらんことを思ひて、かさねてねんごろに修せんことを期す。況んや、一刹那のうちにおいて、懈怠の心ある事を知らんや。何ぞ、たゞ今の一念において、直ちにすることの甚だ難き。」(第九二段)と、さとす。

これらは、それぞれに、日常的な話材を適切に配することによって、具体的に、諸縁放下・一念確立の要を説いた段である。その他、仏道に専念して、そのために世事にはうとかった高野の証空上人や、梅尾の明慧上人の言行に、

あるいは、「ますほのすゝき」の語源を問うために兩をいとわず、それを知る聖を訪ねた登蓮法師の態度に、心を惹かれる話からなる段の類は、すべて一心専念の個性の激しさの中に、兼好が、あるべき人の姿を発見し共感したものに外ならない。(第一〇六・一四四・一八八段)

ところで、徒然草一篇をとおして知られる兼好の人となりは、実に博学・博識であり、しかも、諸芸一般に堪能である。筆のおよぶところ、時として、自負自賛の一面すらも露呈する。また、ことに彼の人間洞察・自然観察・情趣理解の眼識には、およそ尋常でないものがある。私見にわたるが、実は、そのような博識多芸・才気煥発・多情多感の彼であったからこそ、ひとしお「諸縁放下」の提唱は、彼にとって切実な課題であったように考えられる。随所に、緩急あい俟って説くところの、「求道」のすすめ、そのための「諸縁放下」の高唱が、単に、出世間的な教理教説のひびきに終始することなく、読むわたくしに、時に強い感銘と、親しみを、同時に覚えさせるのも、そうした事情あつてのことであらうと思われる。

人間の儀式、いづれの事か去り難からぬ。世俗の黙しがたきに随ひてこれを必ずとせば、願ひも多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雑事の小節にさへられて、空しく暮れなん。

日暮れ、塗遠し。吾が生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ礼儀をも思はじ。この心を得ざらん人は、物狂ひともいへ、うつゝなし、情なしとも思へ。毀るとも苦しまじ。誉むとも聞き入れじ。

(第一一二段)

まさに、人生における我が身の一大事を痛感した、求道者兼好の面目は、右のような、強烈な自己凝視ないしは反省のことばの中に、躍如たるものがある。

「諸縁放下」の提唱は、無常觀を基調とし、その上に開顯した兼好の仏教思想として、きわめて重要な性格をもっている。<sup>(2)</sup>

#### 四 「遁世」ということ

筆を執れば物書かれ、樂器を取れば音をたてんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、骰子さいを取れば攤だうたん事を思ふ。心は必ず事に触れて来る。かりにも不善の戯れをなすべからず。  
(第一五七段)

兼好は、一般に、人の心というものは、対象に誘発されやすく、環境に左右されやすいことを、右のように述べ、かりにも、不善のたわむれば、これをつつしむべきことをすすめる。

あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非をあらたむる事もあり。かりにいまこの文をひろげざらましかば、この事を知らんや。これ則ち触るゝ所の益なり。心更に起らずとも、仏前にありて数珠を取り、經を取らば、怠るうちにも、善業おのづから修せられ、散乱の心ながらも繩床に座

せば、覚えずして禪定なるべし。

(右同段)

清淨のおこないは、またいつしか清淨の心境を保たせる。

このようになによりも、先ず、形を整えて、心の問題を考えることが必要である。「外相もし背かざれば、内証必ず熱す。しひて不信を云ふべからず。」このような考えを、形式主義の名のもとに、実践以前に非謗するのは、不見識であろう。「心は縁にひかれて移るものなれば、閑ならでは道は行じがたし。」(第五八段)これも、右に同様の趣旨である。

ところで、兼好は、遁世生活について、自己の体験を通じて次のように述べている。

そのうつは物、昔の人に及ばず、山林に入りても、餓を助け、嵐を防ぐよすがなくてはあられぬわざなれば、おのづから世を貪るに似たる事も、たよりにふればなどかなからん。さればとて、「背けるかひなし。さばかりならば、なじかは捨てし」などいはんは、無下の事なり。さすがに一度道に入りて世を厭はん人、たとひ望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけ、藜あかきのあつ物、いくばくか人の費をなさん。求むる所はやすく、その心はやく足りぬべし。かたちに恥づる所もあれば、さはいへど、悪には疎く、善には近づくことのみぞ多き。

(第五八段)

これは、いかにも現実的な論説である。山林にのがれた生活とはいっても、自分の器量は、古聖のきびしさに比較できるようなものではなく、したがって、先ず生存のための必要最少限の準備は不可欠であることをいい、その意味では、折に触れて世俗生活に似た一面もあることを認めている。しかし、そのことは、ただちに出家遁世の無意味につながるものではない。なぜならば、そこに要する衣・食・住のたぐいは、それを求めるために起こる世俗の貪欲に比べる時、およそ問題にはならないからである。なお、遁世者としての体面は、自然に悪にうとみ、善に親しむよすがにもなるとも付言している。かくて出家遁世は、世俗の因習と一旦の絶縁をこころざし、仏道を求める人にとっては、もっとも理想的な境界である。「人と生れたらんしるしには、いかにもして世を遁れんことこそ、あらまほしけれ。」(同段)このように兼好は、懇切に、熱意をこめて、遁世の要をすすめている。勿論、今日の世相からみれば、こと改った出家遁世など、夢に近い。だが、その精神には、なお、十分に今日的な意義があるように思われる。人は誰しも、欲望とそれにとまなう雑念のないものはない。しかも、ありとあらゆる欲望雑念を助長する環境は、日進月歩、人みずからの手で造成されていく。問題は、そのような現実の中で、自己の欲望雑念の増長を、どの程度に喰いとめて、自己にとって当面必要かつ不可欠の目標に、いかに心を振り向けるか、それにふさわしい生活環境を、いかに整えるかである。「一事をなさんと思はゞ、他の事の破るゝも、いたむべからず。人の嘲をも恥づべからず。万事にかへずして、一の大事成るべからず。」(第一八八段)「大事を思ひ立たん人は、去りがたく心にかゝらん事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。」(第五九段)「ひとへに貪る事をつとめて、菩提におもむかざらんは、万の畜類に変わる所あるまじくや。」(第五八段)心におこるさまざま願望を、さながら放下して、

ほんとうになすべきことを、ためらわずただちに実行に移すには、非常な決意と覚悟、それに努力がいる。自己をとりまく生活環境を、物心両面から浄化し、整備することは、さまざまな「楽欲」の誘発を未然に鎮静して、当面の大事に全力をかたむける第一歩であろう。人生の意義発見の場としての、物心両面からみた理想的な生活環境の設計、わたくしは、ここに兼好の「遁世」思想の今日的意義を認めたいのである。

## 五 存命のよろこび

わたくしは、前項までに、兼好は作品徒然草をとおして、「無常」の実態を説き、そのことを理解せずして惑い、それを悲しむことのみで終わる愚かさを説き、人はすみやかに「無常」の理を深め、確かめ、その「無常」の活火山上にいとなむところの「諸縁」を、いさぎよく放下して、一途に「求道」に向かうべきことを説いている点に触れた。

しかし、兼好のこの思想は、決して人世そのものに背離した、いわゆる厭世主義を基調に展開するものではなく、それは、決して退嬰的・消極的な人生観ではなかったことを、ここに注意したい。

人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に楽しまざらんや。愚かなる人、この樂しびを忘れて、いたづがはしく外の樂しびを求め、この財を忘れて、危ふく他の財を貪るには、志、満つ事なし。生ける間生を

楽しまずして、死に臨みて死を恐れれば、この理あるべからず。人皆生を楽しまざるは、死を恐れざる故なり。

死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るゝなり。もしまた、生死の相にあづからずといはば、実の理を得たりといふべし。  
(第九三段)

右によれば、兼好は、先ず「存命のたのしみ」を説き「存命のよろこび」を説いている。「死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に楽しまざらんや。」これだけのことをばを抄出してみると、現実を享樂せよといったニュアンスをもって受けこまれやすいが、決してそのようなものではない。兼好は、ここにいう「存命のたのしみ」を「外の樂しび」「他の財」と明瞭に區別している。いかえれば、世俗の「樂欲」とはおよそ次元を異にした、全く独自のものとして「存命の喜び」を認識していることが知られる。この段の冒頭に引くところの、牛を売る人の話を待つまでもなく、人は、死をのがれることは絶対にできない。「若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期」(第三七段)なのである。しかし、死が、老少善悪をえらばぬように、現在の生もまた、老少善悪いずれの人にとって事も事実であり、「今日まで(死を)逃れ来にけるは、ありがたき不思議」(右同段)であり、「一日の命、万金よりも重し」(第九三段)である。人は、現に、絶対の生をうけながら、相對の「樂欲」に執着して、死の近いことを忘れ、あたり一生をむなくついやし、やがて、その到来に恐れおののく。それでは、ほんとうに生を愛し、楽しんだことにはなり得ない。「無常」を自覚徹底すれば、そのまま「存命のよろこび」となる。前項までに指摘した兼好の、「無常認識」「諸縁放下」「出家遁世」の勧誘は、いかえれば「いたづがはしく外の樂しび

を求め」「危ふく他の財を貪る」心をひるがえして、内なる道念に自己を帰一し、日々存命の、まことのよろこびに開眼せよ、ということになる。

生・住・異・滅の移りかはる実の大事は、たけき河のみなぎり流るゝが如し。暫も滞らず、たゞちに行ひゆくものなり。されば、真俗につけて、必ず果し遂げんと思はん事は、機嫌をいふべからず。とかくのもよひなく、足を踏み止むまじきなり。

(第一五五段)

「無常」を自覚して、「存命のよろこび」を味あい知った時、あらためて寸陰の尊さが思われ、その流失は悔やまれる。「たゞ今の一念、むなしく過ぐる事を惜しむべし」(第一〇八段)「一時の懈怠、一生の懈怠となる。これを恐るべし」(第一八八段)など、随所に惜陰をすすめざとすのは、すべて、この謂に外ならない。

ところで、兼好は、更に「生死の相にあづからずといはゞ、実の理を得たりといふべし」と論究する。すなわち、「生」と「死」とを相對關係において考えず、その二者を止揚した——あるいは廃離した——次元において把え得た時、ほんとうの仏教的悟道は開顯する。そして、その境界への帰一こそ、人生究極の悦楽とするのである。「まことの人は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。——本より賢愚・得失の境にをらざればなり。」(第三八段)この言説にも、兼好が理想とした、人のあるべき境界は、相對的世界観を超越した、無為絶対の妙境にあったことが知られる。<sup>(8)</sup>

或る人、法然上人に、「念仏の時睡におかされて、行をおこたり侍る事、いかゞして、此のさはりをやめ侍らん」と申しければ、「目のさめたらんほど念仏し給へ」と答へられたりける、いとたふとかりけり。又、「往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」といはれけり。これもたふとし。又、「うたがひながらも念仏すれば、往生す」ともいはれけり。これも亦たふとし。

(第三九段)

兼好が、この念仏者法然上人の言説に、ためらうことなく賛仰の意を表明したのも、一宗一派の偏執を超えて、求道的人間の理想像を、そのような絶対信の境界に発見したからに外ならない。

「存命のよろこび・たのしみ」とは、ひっきょう、かかる絶対境への求道の歷程において味得しうる「よろこび」であり、「たのしみ」であると解せられる。これは、徹底した自覚的無常観を基調として、一たびは否定し去った人と世の存在価値の再発見である。

自覚的無常観は、生死・賢愚・得失の相對観を超える。そして、その視点から眺められる世と人のすがたは、従前とは全く異った価値観のもとに扱えられる。それは、ものの一面にのみ目を奪われることのない両面観・立体観である。「あだし野の露きゆる時なく、鳥部山の烟立ちさらでのみ住みはつる習ひならば、いかに、もののあはれもなからん。世はさだめなきこそ、いみじけれ」(第七段)事物の推移変化の相の中に、美的情緒をみとめ味あう、兼好の、この種の文芸観は、澄みきった無常観の上にしか開けまい。いま筆をおよぼす余裕はないが、特に第一三七段を中心に展開する兼好の自然観・恋愛観・趣味観など、どれとして、彼の透徹した自覚的無常観に培われない

ものはない。わたくしは、徒然草における仏教思想と文芸思潮の、いみじき接点をそこにみるのである。

以上わたくしは、徒然草にあらわれた、著者兼好の仏教思想についてながめ、主として、自覚的無常観を基調として展開する、彼の人世批判と、その価値発見の具体相について触れた。なお、彼の無常観と文芸観との融合については、論及のいとぐちを提示するにとどめたが、この点については、改めて論じる機会を持ちたい。

ともあれ、作品徒然草をとおして知られる兼好の、仏教思想の展開が、時代のへだたりを超えて、なお今日的な意義をゆたかにたたえるところ、わたくしは、これを仏教文学作品としての徒然草の、すぐれた思想的生命と認めたいのである。

- (1) 徒然草の「無常観」については、近時、国文学者の間に、第三〇段を境にして、前後、その思想的 content に浅深の推移が認められる旨の推論があるなど、別に考察しなければならない問題がある。拙論「徒然草の無常観について」(大谷大学国文学会報第十四号)参照。
- (2) 兼好の「諸縁放下」の所説は、「正法眼藏随聞記」六・第九の影響下に成立したのではないかと推定せられる。特に徒然草五九・一〇八・二四一の諸段との関連は注意に価するものがある。
- (3) 第三八・九三兩段の所説について、老荘思想の影響を認め得ること、諸註の指摘するところである。思うに老荘の思想的究極値である「絶対無差別」「無為自然」の境界が、仏教的悟道と一味に説かれたものであり、兼好独自の(あるいは時代的な)宗教的境界が、そこに醸成されたものと考えられる。

(四三・八・三〇)